
空～微笑みと輝き、そして繋がり

森本タツキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空の微笑みと輝き、そして繋がり

【Nコード】

N0366W

【作者名】

森本タツキ

【あらすじ】

平凡な高校一年生、天音晴を中心に進んでいく物語です。初投稿で、知識も何もない中学生のため、あらすじが全く書けませんでした。ご了承ください。

空が微笑む

俺が小学生の時、祖父が他界した。祖父の悲しみを表すように、その日、空から祖父の涙が降ってきた。

春の心地よい眠りから、カーテンの隙間から入ってくる暖かい日差しによって、俺、天音晴あまねはるは起きた。時計を見ると、もうすぐ六時になるとこだった。普段ならもう少し遅くに起きるが、今日は高校の入学式なので、少し早く起きることにした。俺は朝飯は食べない派なので、支度をしてすぐに家を出た。今日は快晴だ。空に雲ひとつない。・・・いや、一つあった。でも、まあ快晴に変わりはない。・・・でも、あの日の空は泣いていた。祖父の悲しみを表すように。

「おつはよ〜。どうしたんだよ、暗い顔して。珍しく、考え事でもしてたのか？」

「おはよ。ちよっと考え事してただけだよ」

「ふ〜ん、お前が考え事か、珍しいな。・・・これは雨が降る予感。俺、今日傘持ってきてないんだぞ。どうしてくれんだよ」

「そう、雨だったんだよ。あの日も」

「あの日？あの日っていつだよ」

「へっ！ああ、いや何でもない。てか、なんで俺が悪いみたいになつてるの！別に今日、雨が降るって決まったわけじゃないでしょ」

「い〜や、決まってるんだよ。お前が考え事をしたそのときから」

「あ〜そうですか。ど〜せ、俺が悪いですよ〜だ」

「お前、何歳だよ」

「わざとに決まってるでしょ。それより、俺、何組？」

「たしか、俺と同じクラスだったから、一組」

「そっか〜、高校生活一年目は、正義と同じクラスか〜。よかった〜、知り合いがいて」

「ハハッ、そうだな。そろそろチャイムなるから、席に着こうぜ」
「担任、どんなのだと思う?」

「興味なくし」

「じゃあ、話しかえるけど、お前、今朝どんな考え事してたんだよ? 教えてくれよ」

「琴音になら、教えてもいいか。ちなみに、琴音のフルネームは、こと琴音ねじゅん純。一応、一番仲もいいし、信頼できるやつだ。」

「考え事じゃなくて、昔のことを思い出して立って言ったほうが正しいかな。ただ、じいちゃんが死んだ時も降ってたんだよ、雨が。・・・まるで、じいちゃんの悲しみを表しているように、降ってたんだ、雨が」

「そうか。でも、お前がそうやっていつまでも、過去のこと思い出すたびに、落ち込んでたんじゃあ、死んでしまったお前の爺さんだつて、前に進めないぞ」

「・・・じゃあ、俺はどうすればいいの? じいちゃんの悲しみを背負い込むこと以外に何をすればいいの?」

「笑顔に変えてやれよ。悲しみから、喜びに。笑顔に、お前の力で変えてやれよ。お前のことをいつまでも、どこからか見守ってくれている爺さんに、見せてやれよ、お前の頑張ってる姿。」

「・・・ありがとう、琴音。琴音純の存在のおかげで俺、本当に助かった。俺の中の答え、見つけることができたと思う」

「そうか、よかったな」

「え、オホン。天音と琴音、話はすんだかね?」

「やばい、そーいやここ学校だった。」

「え」と、その・・・」

「はい、おかげさまで。天音も、前に進むための一步を、踏み出す勇氣を持たたようです」

「そうか、よくわからんが、よかったな」

「よし、では体育館へ移動するぞ」

「左から順に、一組から座っていけ」

「あゝ、あゝ、マイクテストです。生徒の皆さんは起立してください。これから、入学式を始めます。姿勢を正して、礼。着席してください。校長先生のお話です」

「おはようございます」

「おはようございます」

「えゝ、みなさん、ご入学おめでとございます。高校生活での三年間、自分の可能性を広げられるよう、精一杯頑張ってください。以上で終わります」

あれ、もつと長くなると思ってたんだけど、割と短かったな。これで教室に帰って、話を聞いたら終わりだな。

「よし、では今日はこれで終わりだ、皆、気を付けて帰るようになさようなら」

「天音、お前この後、どこに行くのか？」

「じいちゃんの墓参り」

「そうか、頑張れよ」

「ああ、もちろん。じゃあ、行ってくる」

「おう、頑張れよ」

じいちゃんを笑顔にするために俺は進む。絶対に足は止めない。歩み続ける。

「はあ、はあ、じいちゃん、俺、じいちゃんを笑顔にするため頑張るよ。何を頑張るかを決まってるけど、とにかく俺、頑張るよ。もう一度、じいちゃんを笑顔にするために、頑張る。…歩み続けるよ」

俺は、歩み続ける。そう言ったときの空が俺には笑っているように見えた。…空が微笑む。じいちゃんの喜びを表すように、空が微笑む。どこからか見守っていてくれるじいちゃんが、空になって微笑む。

空に輝く

じいちゃんに、歩み続けると誓ったあの日から、俺は、歩み続けた。

じいちゃんを、笑顔にするため、あの空に輝く、太陽のように輝くため。俺は、新たな一步を踏み出した。

「で、どうだった？墓参り。じいちゃんは笑ってくれたか」

「うん。空になって微笑んでくれたよ」

「そっか、じゃあこれからは、自分の人生を生きていけるな」

「うん、今度は自分自身が輝く番だ。これからは自分の道を歩み通
づけるよ」

「天音君と、琴音君いつも一緒にいるけど、もしかして、二人って
ホモなの？」

「いや、違うけど、ただ仲がいいだけ」

「そうそう、ただ仲がいいだけで、ホモでもなんでもないよ」

「わかってないな。ここは、ホモって言うべきでしょ。ホント、
わかってない」

「お前は俺たちに何を求めてんだよ」

「いや、べつになにも」

「なんだよ、そのニヤケ顔は」

「冗談だつて、気にしない、気にしない」

「お前な」

「ちよつといい？」

「どうしたんだ、天音？」

「いや、ちよつと聞きたいことがあって。君、名前なんて言うの？」

「そっいや、名前知らないな」

「私は、汐音梨花ちゃんしおねじかと覚えてよね」

「汐音か、うん、覚えた」

「汐音ね、へ、あ、そう」

「ちよつとムカつくわね」

「はい、はい、平常心、平常心」

「天音はよくこんなのと一緒にいられるわね」

「こんなのってどういうことだ」

「あれ、平常心じゃなかったの」

「もう、やめた、やめた。汐音ね、よろしく、よろしく」

「最後適当だけど、まあいいわ、よろしく」

「なんだかんだいって、結構いい感じだよな、このコンビ。」

「あ、それともう一人紹介したい人がいるの」

「もう一人？」

「そう、奏音出てきていいよ」

「汐音さんがそういうと一人の少女が出てきた。なんだか、穏やかそうな人みたいだ。」

「ほら、自己紹介ぐらい、自分でしなさい」

「まるで、親と子だな。」

「あの、月音つきねかのん奏音です。よろしくお願ひします」

「俺は天音、よろしくね」

「俺は、琴音だ。よろしく」

「月音さん、結構控え目な人だな。汐音さんと、真逆のタイプだ。なんか面白くなりそうだな。」

「あと、天音と琴音の二人にお願いがあるの、聞いてくれる」

「まあ、聞くだけならいいけど。琴音もいい？」

「ああ、聞くだけならな」

「ありがとう。実は、奏音がいじめにあってるの」

「えっ、いじめ！」

「うん、クラスの女子から」

「ごめん、思ってた以上の話だった。でも女子からのいじめなら、女子のほうが止めやすいんじゃないの？」

「そうかもしれないけど、クラスの皆、次の標的にされるのが怖いから、見て見ぬふり状態なの」

「汐音は止めたの？」

「止めたよ！止めたけど、一人の力じゃどうにもならないの」

「汐音、君、月音さんの味方なんですよ。味方ならあきらめちゃだめだよ。一人じゃ無理なら僕が力を貸す。琴音だってちからをかしてくれればずだ・・・たぶん」

「俺だって、力ぐらい貸すさ」
「二人ともありがとう。私、もうちょっと頑張ってみる」
「ああ、頑張れ。汐音は一人じゃないからな、それだけは忘れるな」
「月音も、自分を信じる、自分を好きになれ。そしたら道が開ける」
「あの、ありがとうございます。やれるだけやってみます」
「行くよ、奏音。天音、琴音ありがとね」
どんな形であれ、こうやって人に勇気を与えたりして、皆を希望の光で照らすことができれば、あの空に輝く太陽や、月のように輝くことができるのかもしれない。人々を明るく照らす、太陽や、月のように。」

空で繋がる

短期間の間にいろいろなことがあった。そしてこれからも、俺が歩み続ける限り、つながりが増え、大切なものも増える。自分が変われば、すべてが変わったように思える。今の俺には、友という大切な繋がりがある。

「天音、例のいじめなくなったらしいぞ」

「そっか、これで汐音も、月音もとりあえずは一安心だな」

「ああ、俺もうるさいのが来ないからずいぶん楽で助かってる」

「私、そんなにうるさかったかな、琴音君」

「げっ、汐音」

「げってなによ、せっかくお礼言いにきたのに」

「別にお礼なんかいいよ。お帰り」

「えっ、お帰り？」

「一度言ってみたかったんだ。それに、俺はあの日、大きな繋がりを感じたんだよ。だから、お帰りって言ってみたくなったんだ」

「繋がりか。いろんなことあったけど、私、またここに帰ってきてるからね。これも繋がりのおかげかな」

「そう、俺たちはどこにいたって、繋がってるんだよ、きつと」

「なんかいいな、そういうの」

「あの、私もその繋がりの中に入ってますか？」

「月音、入ってるよ、当り前じゃないか」

「よかった。ありがとうございます」

世界中が空で繋がっているように、俺たちも固い絆で繋がっている。生まれた瞬間から、人と人はつながっているんだ。

「俺決めた」

「何を？」

「次の歩む理由」

「へへ、何？」

「秘密」

俺は過去と未来をつなげるために、これからも歩み続ける。．．．
ずっと、ずっと、歩み続ける．．．。
空の可能性．．．微笑みと．．．輝きと．．．そして繋がりのため
に．．．どこまでも、歩み続ける。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0366w/>

空～微笑みと輝き、そして繋がり

2011年10月9日15時03分発行